

「資本論を読む会」便り

2025.10.12 No. 103

第Ⅰ部は、各段落の音読み→レポーターの報告→皆で議論、という進め方になりました。文字通り「読む会」で、当会スタート時のスタイルです。

※お詫び 今回、要点を手短にまとめるのが難しく(特に第Ⅱ部)、議論のご紹介ができませんでした。申し訳ありません。

第Ⅰ部：第1篇 第1章 第3節 Aの三 等価形態 (続き)

第Ⅱ部：第3篇 第13章 機械と大工業 第1節 機械の発達 (続き)

※ 編集人の復習ノートです。レジュメや参考書、議論を基に、読んだ箇所の要点や調べた結果をまとめました。

段落は、大月書店の全集版の本文の字下げと傍注の付け方で区切っていますが、原則通りでない場合もあります。段落番号の後の小さい字は、(原著ページ番号)と段落の出だしなどです。

第104回

第Ⅰ部 第1篇 第1章 第3節 価値形態または交換価値

A 単純な、個別的な、または偶然的な価値形態

三 等価形態 (つづき)

第9段落 (72) 「等価物として役だつ商品の身体は、つねに抽象的人間労働の…」 ～

等価形態の第2の特色：等価物を生産する具体的労働が抽象的人間労働の表現となる。

●等価形態にある商品(上着)は、具体的有用労働(裁縫労働)の産物であるが、抽象的人間労働の単なる実現として認められる。

即ち、上着に実現される裁縫労働は抽象的人間労働の単なる実現形態として認められる。

●リンネルの価値表現では、上着の使用価値はリンネルの価値を具体的に表すという役割が問われているだけで、上着の使用価値本来の有用性は何も問われていない。

従って、裁縫労働の有用性は、それが衣服を作ることにあるのではなく、それ自身が価値であると見られるような物体、つまりリンネル価値に対象化されている労働と少しも区別されない労働の凝固であると見られるような物体をつくるという点だけが問われている。

●上着という価値鏡をつくるためには、裁縫そのものは、人間労働であるというその抽象的属性のほかにはなにも反映してはならない。

●裁縫労働は、抽象的人間労働という目に見えない内的なものが外的な物として現れた実現形態となっている。

第10段落 (72) 「裁縫の形態でも織布の形態でも、人間の労働力が支出される。…」 ～

等価形態の第2の特色的神秘性

●価値生産

リンネルの価値は、織布労働の形態で人間労働力が支出され形成される。

●リンネルの価値表現

織布労働がその無差別な人間労働一般という属性においてリンネルの価値を形成すると

- いふことを表現するために、
この織布労働に対し、
リンネルの等価物である上着を生産する裁縫労働が、その具体的な労働の形態のままで、
抽象的人間労働の手でつかめる実現形態として現れる。
●裁縫という具体的な労働が抽象的人間労働の現実に目に見えるものとして現れている。

第11段落 (73) 「だから、具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の…」 ~

等価形態の第2の特色のまとめ

- 具体的労働がその反対物である抽象的人間労働の現象形態になることが、等価形態の第2の特色である。

第12段落 (73) 「しかし、この具体的労働、裁縫が、無差別な人間労働の…」 ~

等価形態の第3の特色

- 私的労働が直接に社会的な形態での労働となることが、等価形態の第3の特色である。
●上着の現物形態を作る具体的な裁縫労働が、抽象的人間労働の表現として認められる。
故に、上着を作る労働は、リンネルの価値を形成した労働と同等性の形態を持つ。
そのことによって、裁縫労働は私的労働でありながら、同時に直接に社会的な形態にある労働と認められる。
●こうして、上着は、私的労働でありながら直接的に社会的な形態にある裁縫労働の産物だから、他の商品との直接的交換可能性を持つ。

第Ⅱ部 第3篇 第13章 機械と大工業 第1節 機械の発達

第6段落 (395) 「多くの手工業道具では、ただの原動力としての人間と、…」 ~ (注94まで)

動力が人間から自然力や蒸気機関に代わっても産業革命を引き起こさなかった。産業革命はまず第一に道具機を捉える。蒸気機関の革命も道具機の創造に続いた。

- 手工業道具に対する人間の関わり方(多くの場合)
 - ①原動力 例: 足で紡ぎ車を回す
 - ②操作器 例: 手で糸を燃る(紡績の本質的作業)
- 産業革命 操作器の部分をまず第一にとらえる。
 - 動力については、さしあたりはまだ人間任せ。
- 人間が単純な動力としてそれに働きかけるだけの道具の場合
 - (挽き臼の柄を回す、ポンプを動かす、ひいごの柄を上下する、臼でつく、など)
 - ①動力源として動物力・水力・風力が利用される。
 - ②マニュファクチュア時代やそれ以前から機械に成長するが、生産様式を変革しない。
 - ③手工業的形態にあってもすでに機械である。
- 機械的な動力そのものは産業革命をもたらさなかった。
 - 例: 1836-37年のオランダのハレム湖干拓用ポンプ = 従来方式のポンプ + 蒸気機関
 - ・鍛冶工のひいご + 蒸気機関で、機械になることがある。
- 蒸気機関
 - ・17c末(マニュファクチュア時代)に発明され、18cの80年代初めまで存続
 - ・産業革命を呼び起さなかった。
 - ・道具機の創造こそが、蒸気機関の革命を必然的にした。
- 人間が道具機の単なる動力になれば、風や水や蒸気などで置換され得る。

その結果、人力向けの機構に、大きな技術的变化が生じることもある。

第7段落 (396) 「産業革命の出発点になる機械は、ただ一個の道具を…」～(注95まで)

産業革命の出発点になる機械は、一つの機構をもってくる。

●産業革命の出発点になる機械

- ・一個の道具を取り扱う労働者の代わりに一つの機構をもってくる。
- ・この機構は一時に多数の同一または同種の道具を用いて作業する。
- ・単一の原動力によって動かされる。

※まだ機械的生産の単純な要素である(まだ体系化された機械生産ではない)。

第8段落 (396) 「作業機の規模とその同時に作業する道具の数との増大は、…」～(注99まで)

作業機の規模の拡大は動力機の発展を促進した。それは大工業の最初の科学的・技術的な諸要素を発展させた。

●作業機の規模とそれが使う道具の数との増大は、より大規模な運動機構を要求し、人力以上に強力な動力を要求した。

●道具機の動力としては自然力(馬、風、水力)を利用することができ、自然力や機械的動力が人力にとって代わる。

○伝導機構の規模が拡大すると、水力では不十分になる。

○摩擦の法則の精密な研究や、動力の作用を均一にする為に節動輪(弾み車のこと)の理論と応用が誕生した。

●マニュファクチャ時代は、大工業の最初の科学的な、技術的な諸要素を発展させた。

○アークライトのスロッスル紡績機は最初から水力で運転された。

○ウォット(ワット)の複動蒸気機関

- ・石炭と水で動力を生みだした。人間の制御に服した。可動的。
- ・所在地に関して、局地的な事情に制約されることが比較的少ない。
- ・技術的応用という点で普遍的。(後に、蒸気ハンマー用、海洋汽船用の蒸気機関へと発展した。)

第9段落 (398) 「まず道具が人間という有機体の道具から…」～

原動機が人力の限界から解放され、駆動される道具機数の増大とともに原動機も大きくなり、伝導機構は巨大な装置になる。

●道具が人間の道具から機械装置(道具機)の道具に転化されてから、原動機もまた一つの独立な、人力の限界から完全に解放されたものになった。

○個々の道具機は、機械的生産の単なる一要素になった。

○一つの原動機が多数の作業機を同時に動かすことが可能になり、同時に動かされる作業機の数が増すにつれて、原動機も大きくなり、伝導機構は巨大な装置に広がった。

第10段落 (399) 「ところで、二つのものが区別されなければならない。」～(注100まで)

多数の同種の機械の協業と機械体系。(その1)

●(1)多数の同種の機械の協業と、(2)機械体系の、二つが区別されなければならない。

●その1 多数の同種の機械の協業

○マニュファクチャの中で分割されて一つの順序をなして行なわれる総過程が、いろいろな道具の組み合わせによって働く一台の作業機によって完了する。一つの製品全体が同じ作業機でつくられる。(単純な協業の再現)

作業 一人の手工業者が自分の道具で行なっていたものか、

複数人の手工業者がいろいろな道具で順々に行なっていたものである。

例 封筒を製造する近代的マニュファクチュアは、部分作業毎に人手を替えた。

1台の封筒製造機は、全作業を一度に行ない、1時間で3000以上を作る。

○このような作業機が一つの複雑な手工業道具の機械的再生でしかないものであろうと、またはマニュファクチュア的に特殊化された各種の簡単な用具の組み合わせであろうと、工場(機械経営にもとづく作業場)では、つねに単純な協業が再現する。

さしあたり、同時に働く同種の作業機の空間的集合として再現する。

例：織物工場 多数の力織機が並列する。

裁縫工場 多数のミシンが並列する。

ここには一つの技術的な統一がある。

共同の原動機の運動が伝動機構を通じて多数の同種の作業機に伝えられている。

これらの作業機が同時に均等に作動する。

○この伝動機構もまたある程度までこれらの作業機に共通である。というのは、各個の道具機のために、伝動機構の別々な先端が枝になって出ているだけだから。

たくさんの道具が一つの作業機の器官をなしているように、今では多数の作業機が、

ただ同じ運動機構の同種の諸器官をなしているだけである。

※機械の出発は、「労働からではなく、労働手段から」。

第11段落 (400) 「ところが、本来の機械体系がはじめて個々の独立した…」～(注102まで)

多数の同種の機械の協業と、機械体系。(その2)

●その2 機械体系

○機械体系が現われるのは、労働対象のいろいろな段階過程が、さまざま(互いに補い合う)一連の道具機によって行なわれる場合である。

○ここでは、マニュファクチュアに固有な分業による協業が、部分作業機の組み合わせとして再現する。

○いろいろな部分労働者(羊毛マニュファクチュアならば打毛工や梳毛工や剪毛工や紡毛工など)の独自な道具が、今では、特殊化された作業機の道具に転化しており、それぞれの作業機は結合された道具機構の体系のなかで一つの特殊な機能のための特殊な器官になっている。

○機械体系が初めて取り入れられる部門では、大抵マニュファクチュアそのものが、機械体系に生産過程の分割の、またその組織の、自然発生的な基礎を提供する。

しかし、すぐに本質的な区別が現われる。マニュファクチュアでは個々の部分労働者が、様々に分かれて、それぞれの特殊な作業を手工業道具で行なう。労働者自身が一連の過程に同化され、過程も労働者に合うようにされる。しかし、このような主観的な分割原理は、機械による生産ではなくなる。

○機械による生産では、総過程が客観的に考察され、各構成段階に分解される。これは、蓄積された大規模な実際上の経験と、力学や化学などの技術的応用によって解決される。

○各部分機械は、すぐその次にくる部分機械にその原料を供給する。それらはみな同時に働いているから、生産物は絶えずその形成過程のいろいろな段階の上にあると同時に、絶えず一つの生産段階から別の生産段階に移ってゆく。

○マニュファクチュアでは部分労働者の直接的協業が特殊な労働者群のあいだの一定の比倒数をつくりだした。機械体系の場合は、いろいろな部分機械が絶えず互いに関連して働くことができるよう、それらの数・大きさ・速度のあいだに一定の割合を作りだす。

○機械体系は、その総過程が連續的であればあるほど、つまり人間の手に代わって機構そのものが原料を一つの生産段階から次の生産段階に進めてゆくようになればなるほど、完全なものになる。

○マニュファクチュアでは各種の特殊過程の分立化が分業自体によって与えられるが、発達した工場ではいろいろな特殊過程の連續が支配する。